

# 中世後半 York における貿易の衰退

出 羽 秀 明

## The Decline of Foreign Trade in the Later Middle Ages of York

Hideaki Dewa

「……かつて、イングランド王国内の古くからの都市は、人口が極めて多く、商人、手工業者らが中心となって居住していた。これらの都市は、当時、よき秩序と礼儀を保ち、子弟は慈しみ育成され、大いに富み栄えていた。……が、これらの都市は今や全く破滅、衰退の危機に瀕している。……」。<sup>1)</sup>

中世後半に、イングランドの海外貿易が著しい拡大を示したことは周知のことである。<sup>2)</sup> この拡大を、この時期のイングランド経済の「陽」の面とすれば、同じ時期の多くの地方港市の縮少は「陰」の面であった。

本稿で扱う York は、かつて、ロンドンに次いでイングランド第2の都市といわれ、イングランド北部の商工業を始め、政治、宗教の中心地としての重きをなしており、地方都市の中では際立った存在であった。しかし、中世後半には、衰微した地方港市の一つに数えられ、それまで担っていたほとんどの役割はなくなってしまっていた。ここでは、York の衰退を特に海外貿易を通じて跡づけてみた。

1) The Statutes of the Realm, vol. I V, p. 244., Act to Remedy the Decay of Corporate Towns, 1554., reprints 1963.

2) 例えば Fisher, F. J., Commercial Trends and Policy in Sixteenth Century England, Eco. H. R., 1st Ser., vol. x, no. 2., 1940.

### (一)

13世紀末から14世紀にかけ、イングランドの輸出商品の大宗は、原料羊毛であった。年平均の羊毛輸出量は、1281年から1285年までの5年間の26,710 sacks から、14世紀の初め1305年から1309年の5年間には、40,000 sacks を超えた。<sup>1)</sup> この羊毛輸出を担ったのは、もともと、

12世紀の Flanders 商人に続いて13、及び14世紀初めのイタリア商人など、主に、外国商人達であった。外国商人達は、<sup>2)</sup> 14世紀を通じて次第にこの羊毛貿易から締め出され、15世紀初めの1405年には総羊毛輸出量12,866 sacks のうち、僅か8%を担ったに過ぎなかった。外国商人に代わって羊毛輸出を担ったのは、<sup>3)</sup> Staplers と呼ばれたイングランドの羊毛商人たちであった。しかし、羊毛輸出の主導権が外国商人の手からイングランド商人の手に移行した時期には、既に、イングランドからの羊毛輸出は、下降傾向をたどっていた。<sup>4)</sup> 1381年から1390年の10年間には、平均18,590 sacks と2万 sacks を割り込み、1431年から1440年には7,374 sacks まで減少した。<sup>5)</sup> この羊毛に代わって、後に輸出商品の主力となった毛織物は、14世紀半ばから Yarmouth, Ipswich, London, Southampton などの東部諸港や西部の Bristol から、その後、Newcastle, Hull 等の北部、Poole などの南部港からも輸出され始めた。<sup>6)</sup> 1351年から1360年の10年間の平均輸出量は、5,411 cloths にすぎなかったが、14世紀末の1391年には、21,112 cloths に達した。<sup>7)</sup> こうした毛織物の市場を開拓したのは、マーチャント・アドベンチャラーズと呼ばれる商人達で、彼らは北は北海沿岸から南は地中海に至るまで、開拓しうる地域に対しては所を選ばず、あらゆる社会的、自然的な危険を冒して、貿易のために出かけていった。<sup>8)</sup>

イングランドの羊毛輸出量がピークにあった14世紀初め、Hull は主要な羊毛輸出港としての地位を占めていた。1305—6年のイングランドの羊毛輸出量41,313 sacks のうち、7,288 sacks が Hull から輸出された。これはロンドンからの輸出量のほぼ1/2に当たり、地方港の中では Boston の10,200 sacks に次いで2番目であった。<sup>9)</sup> 13世紀の初め、York の商人は、Hull の貿易において余り重要な地位を占めていなかった。13世紀の初め、Hugh Selby, Adam Flur が低地地方に羊毛を輸出し、1272年に Nicholas Langton, Robert Bromholme が Franders に、また、同じ時期に John Graa, Peter of Appleby らが羊毛輸出に従事していた。1275年には、たった4人の York 商人が、13 sacks の羊毛と1 last の皮革を輸出したのみであった。13世紀の終りから14世紀の初めにかけて、York 商人による羊毛輸出量は次第に増大し、1306—7年には Thomas が143 sacks の羊毛を輸出した。それでも1324—5年にイングランド商人によって Hull から輸出された羊毛1,300 sacks のうち York 商人は、1/6の200 sacks を担ったにすぎなかった。<sup>10)</sup> 14世紀第2—4半期に入り、York の海外貿易は拡大し始めた。York は1326年、及び、1333年に Newcastle, Lincon などの7都市と共に、国内ステーブル都市として指定され、イングランドにおける主要な羊毛都市となった。<sup>11)</sup> York の羊毛貿易の主導権も、それまで突出していたドイツ、イタリア、フランダース等の外国商人の手からようやく York 商人の手に移った。1333年の3月から9月にかけて羊毛1,450 sacks が York から輸出された。その中には John Randman, Thomas Lindsey, Henry Goldbeter ら5人の York 商人が含まれていた。<sup>12)</sup> また、1339年に John Goldbeter は、Antwerp へ1,000 sacks の羊毛輸出の許可を得た。<sup>13)</sup> 1363年には John Gisburne, Roger

Hringham ら 2 人の York 商人が the Company of the Staple の alderman になった。<sup>14)</sup> Hull からの羊毛輸出もこの時期には拡大を示し、その輸出量は 1330—1 年の 7,733 sacks から 1356—57 年には 8,429 sacks に達した。Hull から羊毛を輸出したイングランドの商人達の中で、York の商人達は最も重要な集団を形成するまでになっていた。1378 年—9 年には Hull からの羊毛輸出量のほぼ 60% が Robert Ward, Robert Savage, Simon Quixley らの York 商人によって担われた。この時期に羊毛を輸出した Robert と Thomas の Holme 兄弟は、1391—2 年にも 400 sacks 以上の羊毛を Calais に輸出した<sup>15)</sup> 14 世紀末には York 商人の貿易範囲も次第に拡大し、Calais を始め、低地地方、フランス、スペイン、ポルトガル、北海・バルチック海地域、デンマーク、さらに、プロシヤにまで及んだ。<sup>16)</sup> 1446 年に死亡した Thomas Gryssop, chapman, の在庫品の中には、Brabant, Champagne の毛織物、Flanders のチェスト、Doncaster のナイフ、Prussia の手袋が含まれていた。<sup>17)</sup>

14 世紀半ばに少量ながら輸入されていた毛織物の輸出は、この時期から増大し始めた。発展しつつあったイングランドの毛織物工業のために、他の諸港市の商人達が、新たな市場を求めたように、York の商人も、また、羊毛に代わって、かなりの毛織物を輸出するようになっていた。14 世紀末までには Hull からの羊毛輸出量は、2,000 sacks を割り込み、もはや、羊毛は唯一の主要な輸出品ではなくなっていた。毛織物の輸出量は、1359—60 年の 446 cloths から、1389—90 年には、ほぼ 12 倍の 5,397 cloths に増大していた。1383 年には、もはや、Hull への輸入商品の中に、毛織物は見られなくなった。この Hull からの毛織物輸出量の少なくとも半分は、York 商人によって担われた。1398—99 年の Hull での全輸出入の総額 £25,000 のうち、York 商人は約 1/2 にあたる £10,387 を取り扱った。そのうち羊毛は £6,110、毛織物は £1,225 であった。<sup>18)</sup> 15 世紀に入り、Hull の海外貿易は、さらに拡大し、貿易額は 1407 年から 1417 年に、ほぼ £390,000 に達し、ワインの輸入は 14,000 ton を超えた。毛織物輸出も、1401—2 年にはイングランドの総輸出量のほぼ 10% を占め、York 商人による毛織物輸出も増大した。York 商人は York、及び、その近郊において製造された毛織物を、低地地方を始めフランス、プロシヤに送った。1391—92 年に Robert Ward は低地地方に £180 の毛織物を輸出し、大青染料、アカネ染料、明礬、油脂等を持ち帰った<sup>19)</sup> 同じ年、John Spaldynge は、Hull から £15 の価額の毛織物 10 cloths を、その他、明らかに 7 人の York 商人によって、156 cloths の毛織物が輸出された。また、9 月 1 日の Hull の関税帳簿には、毛織物を輸出した 4 人の York 商人の名が見られる。1401 年に William Melburn は、York の Christopher 号で £176 5s. 8 d. の価額の毛織物 13 cloths を、また、同じ年に Thomas Friston は、Mighall 号で毛織物を輸出した<sup>20)</sup>

York の経済はこうした毛織物輸出の増大、及び、毛織物製造業の発展によって、この時期

全般的な拡大を示した<sup>21)</sup> 市民登録数は14世紀前半の1301年から1311年、1311年から1321年のそれぞれ年平均35人、46人から、14世紀後半の1361年から1371年には、100人を超え、さらに、1391年から1401年には118人になった。1377年の人頭税に基づく推定では、Yorkの人口は10,000人を超え、Bristolを抜いてロンドンに次ぐ位置にあった。<sup>22)</sup> Yorkの人口は14世紀末から15世紀初めにかけてさらに増大し、15世紀初めには12,000人を超えた。後に、イングランドを訪れた1イタリア人は、「ロンドンを別として、西海岸 Bristol と、スコットランドとの境界地方にある York を除いて、この王国には主だった都市はない」と、述べた。

こうした海外貿易の著しい拡大は、一部は都市当局による干渉を防ぐため、そして、一部はハンザ商人等の外国商人に立ち向かうためにより強力な貿易商人の団体を組織する必要を生じさせた。また、祭礼や結婚式、葬式を共に行ない、そして自分の死後、その魂に祈りを捧げてもらうために、一つの団体に所属することを望むという、中世の人々に共通の願望もあった。Yorkの海外貿易を担った貿易商人の組合は、——後に York のマベチャント・アドベンチャラーズ組合となった——その起源を1356年に遡る。1356年に市内の Fossgate の土地が、William Percy 卿により、York の市民であり商人である John Freboys, John Crome, Robert Smeton の3人に寄贈された。<sup>23)</sup> このこと自体は新たな貿易商人の組合の開始を記すものではない。しかし、これは組合形成の予備的段階であった。翌年、主として Drapers, Mercers, Dyers, Hosiers 等の毛織物製造に携わる13人の人々は、国王 Edward 3世から特許状を付与され、「our Lord Jesus Christ and the Blessed Virgin Mary」を祭る人々のための組合を組織した。<sup>24)</sup> この組合の総裁は、前年に土地を寄贈された商人の1人 John Freboys であり、John Crome も13人の設立メンバーのうちの1人であった<sup>25)</sup> この組合は王室、及び、組合のメンバー (brothers, sisters) のために St. Crux 教区教会で祈りを捧げることの代わりに財産を所有し、1人の総裁を選出する権利が与えられた。総裁はその財産を運営、管理する権限を持った。組合結成の元来の目的は、経済的利益の追求よりは、むしろ宗教的慈善活動にあった。ただ、「the Fraternity and Gild of……」という組合の名称から、その両方の性格を持っていたと考えられる。14世紀末にはこの Fraternity と Gild は異なる印章を持ち、別々の組織として区別され、別々の総裁を持っていた。<sup>26)</sup> 1360年に組合は、再び国王から特許状を付与され、その活動の範囲を広げた。<sup>27)</sup> 60年代後半には、組合は世間に広く知れ渡るようになり、York のさまざまな業種の人々や、他の都市の人々もメンバーに加入するようになった。1366年の組合の会計帳簿には、Butchers, Spicers, Potters, Coke, Bower 等の職種がメンバーや寄贈者の中に見られた。また、1366年に Newcastle の Johanne Spicer と Whitby の Johanne Barker が、翌年には Hull の Johanne de Dunylton が入会した。<sup>28)</sup> 1368年の組合の会計帳簿には、大ホール設立への言及がある。組合は1372—3年に国王、及び、大司教から救貧院設立の許可を与えられた。この救貧院は、13人の「poor and feeble」な人々のためのもので、組合のホールの地下室があてられた。この時期に救貧院のマ

スターのもとには2人の貧しい生徒がいた。14世紀末までには、この組合は宗教的よりは、むしろ経済的色合いが濃くなっていた。1398年の会計帳簿で、searchers に関する最初の言及がなされたが、これは欠陥商品や取引きの違反を探索する役目を持つ役員であった。York の海外貿易の拡大と共に、組合はその性格を明確にし、メンバーから全ての雑多な職種の人々と、他の都市の人々を排除し、そのメンバーを York の Mercers, Merchants に限定した。1420年に最初のメンバーの名簿があり、これには、「The names of all the free brethren of mercers and merchants of York some times called the Gild of the Holy Trinity in Fossgate」の見出しが付けられている。もはや、メンバーの中に Cooks, Butchers, Potters, Bakers, Tilers 等の職種の者は見られなくなった。1373年から1472年にかけて、市民加入者のうち Mercers は311人、Merchants は239人、Mercators は235人にのぼった。1272年から1372年の間のそれは、それぞれ、229, 17, 66人であった。海外貿易の重要性が増すにつれ、組合のメンバーである貿易商人は、York において最も富裕な階層を構成するようになり、都市行政においても、大きな影響力を持つようになった。14世紀前半には都市の役職に就いた者は稀であり、1301年から1333年の間の8人の市長のうち、ただ2人が羊毛輸出商人であった。しかし、14世紀後半には26人の市長のうち19人が商人で、そのほとんど全員が外国貿易に従事していた。15世紀に入り1430年までに貿易商人の組合は、York の商業、及び、手工業の組合の中で、最も強力で富裕なものになっていた。市長の大部分は貿易商人であったし、組合のホールで決定されたことは市長、及び、市参事会会員からなる市政執行機関によるそれよりも、ずっと市民達に大きな影響を及ぼした。15世紀30年代の Nicholas Blackburn 親子の活躍は、この時期の貿易商人の繁栄を物語っている。彼らは2人とも市長となった。そして、兄は家族のために銀の皿と£800を、地方の貧しい病人と囚人のために£200の燃料、食料、衣服を、そして、彼がいつも旅をしていた道路や橋の補修のためにその財産を遺贈した。

- 1) Carus-Wilson, E. M. and Coleman, O. P., *England's Export Trade. 1275-1547*, 1963, (Oxford), pp. 36, 41.
- 2) Power, E., *The Wool Trade in English Medieval History*, 1941, pp. 52, 53.
- 3) Carus-Wilson, E. M. and Coleman, O. P., *op. cit.*, p. 56.
- 4) Carus-Wilson, E. M. and Coleman, O. P., *ibid.*, pp. 51, 52, 53, 59, 60.
- 5) Carus-Wilson, E. M. and Coleman, O. P., *ibid.*, pp. 75, 76, 77., Lipson, E., *The Economic History of England*, vol. 1, p. 452., vol. 2, p. 10.
- 6) *Cal. Pat. R. 1358-61.*, p. 166., Carus-Wilson, E. M., *Medieval Merchant Venturers*, 1967, (London), pp. 242, 243. 1303-11年に、主としてフランドルから年平均12,000 cloths が輸入されていた。1330年代には2,000 cloths に激減した。
- 7) Carus-Wilson, E. M. and Coleman, O. P., *op. cit.*, p. 87.
- 8) Carus-Wilson, E. M., *op. cit.*, p. XVI, XVII.
- 9) Carus-Wilson, E. M. and Coleman, O. P., *op. cit.* p. 41.
- 10) Bartlett, J. N., *The Expansion and Decline of York in the Later Middle Ages*,

- Econ. Hist. Rev. 2nd. Ser., No. 1, 1959, p. 21.
- 11) Bland, E. M., Brown, P. A., and Tawney, R. H., English Economic History Select Documents, 1914, (London) p.p. 181-184.
  - 12) Miller, E., Medieval York, V. C. H. Yorkshire, The City of York, 1961, p. 100.
  - 13) Cal. Pat. R. 1338-40, p. 330.
  - 14) Miller, E., op. cit., p. 102.
  - 15) Miller, E., ibid., p. 102.
  - 16) Miller, E., ibid., p. 102. 1385年にイングランド商人の商品がプロシヤで差し押えられた時に、33人のYork商人は£1,600にのぼる損失を蒙った。
  - 17) Raine, J., Testamenta Eboracensia, vol. 3., No. 26., The Publications of the Surtees Society. vol. 45. (1865), p. 101.
  - 18) Bartlett, J. N., op. cit. p. 27.
  - 19) Lister, J., The Early Yorkshire Woolen Trade, pp. 26. 29.
  - 20) Miller, E., op. cit., p. 103.
  - 21) Miller, E., ibid., p. 87.
  - 22) Russell, J. C., British Medieval Population, 1948, pp. 23-4, 142-3.
  - 23) Sellers, M., The York Mercers and Merchant Adventurers, The Publications of the Surtees Society, vol. CXXIX, p. III., 1918.
  - 24) Sellers, M., op. cit. p. 1., mercer : 3, hosier : 2, draper, potter, litister, tanner, spicer : 各1, 不明3の合計13人。
  - 25) Collins, F., Register of the Freemen of the City of York, vol. I, (1272-1558), The Publications of the Surtees Society, vol. XCVI, p. 41., 1896., John Freboysは1338年に市民に加入し, 1351年に chamberlain に, 1352年に bailiff となった。1361年に死亡。John Cromeは1348年に市民に加入。
  - 26) Sellers, M., ibid., p. 80., 1482年に master of the hospital は William Cleveland で, master of the company of mercer は John Harper であった。
  - 27) Sellers, M., ibid., p. XJJ.
  - 28) Sellers, M., ibid., pp. 16, 17, 19.

## (二)

Yorkの貿易商人の組合は、1430年にHenry 6世から「the Mistery of Mercers of York」の名称のもと、法人格を付与された。<sup>1)</sup>以後、1580年にElizabeth 1世の特許状によって「the Society of Mercant Adventurers」となるまで、前述の名称を用いていた。この特許状により組合は1人の総裁と2人の監査役を毎年Lady Day, すなわち、3月25日に選出する権利を与えられた。そして、£10の範囲内で土地、家屋等を購入し、所有することを認められた。Gild, 及び, Fraternity への入会金は、個人個人の事情により異なっていた。1435年にWilliam Kattrykは、両方への入会のために、それぞれ3 s. 4 p. を支払った<sup>2)</sup>彼はThomasの息子で、世襲による入会であった。1436年にJohn Russellは合計15 s. を、William Cooperは28 s. 4 p. を、John Makblythは25 s. を支払った。<sup>3)</sup>入会金は次第に

一律となり、両方への入会の場合 6 s. 8 d. とされた。この入会金は、当時のほとんどの職人の賃金が 1 日当たり 4 d. であったことからみて、かなりの額であった。後に、メンバーは、この入会金の他に、年 4 回 2 d. ずつの subsidy を支払わねばならなかった。<sup>4)</sup> 組合の収入はこの入会金、subsidy の他、船舶の積荷に対する支払い、組合が所有していた York、及び、その周辺の多くの土地や家屋の賃貸料等から構成されていた。1435年の会計帳簿の「船積み」の項目には、William Gaunt for freghtyng of a shippe of Berwyk, 6 s. の他、2人の支払いが記載されている。この積荷に対する支払いは、輸出商品の重さに従って 1 s. から 6 s. が課せられた。<sup>5)</sup> これらの収入はホールの維持費、役員、及び、司祭への賃金、Hull やロンドンへ仕事を手配するため、そして、国王の諸特権を確保するための旅費等に使われた。この1430年の特許状を得るために、組合は £41 11s. を国王に支払わねばならなかった。<sup>6)</sup> 組合の財政業務は総裁、監査役、Searchers によって運営管理された。総裁は毎年、全メンバーによって厳重にチェックされた帳簿を提出しなければならなかった。共同の金庫は、これら財政責任者全員の了解がなければ開くことはできなかった。<sup>7)</sup>

国王の特許状を得て、組合のメンバー数は次第に増大した。組合はメンバーの増大に伴ない、1人の法律家と3人の司祭を雇った。彼らは賃金と食糧を与えられた。1432年の会計帳簿には「payde for enter of thaire bretherhede」として15人が、1472年のメンバーのリストには、市長の Cristofer Marshall の他に、83人の名前が記載されている。<sup>8)</sup> これらのメンバーの中には女性の名前が男性とほぼ同数含まれていた。大多数の者は宗教的奉仕活動を夫と共にするために加入したが、その他、商業活動に自ら携わった少数の商人の未亡人達もいた。Marion Kent は、1474年に航海と貿易に関する新しい規約を定めた委員会のメンバーの1人であった。<sup>9)</sup>

Hull の海外貿易は、第 2—4 半期に入り衰退した。1437年から1447年の貿易額は £250,000、さらに、1457年から1467年には、ピーク時のほぼ 1/4 に当たる £100,000 まで低下した。<sup>10)</sup> この衰退は、主として羊毛輸出量の減少によるもので、羊毛輸出量は1407年から1417年までの年平均 3,500 sacks から、1437年から1447年には 1,900 sacks に、さらに、1457年から1462年には 600 sacks にまで低下した。<sup>11)</sup> また、毛織物輸出もこの世紀の 6・70年代から減少傾向を辿った。1465—6年の毛織物輸出量は、ただの 263 cloths であった。14世紀末には 66から 85 隻の船舶が Hull に寄港していたが、1460年代には 61から 65 隻に減った。<sup>12)</sup> 15世紀後半には、毛織物輸出量の減少とは逆に、鉛の輸出量の増大がみられた。1471—2年には £321 13s. 4 p. の価額の鉛 329 fothers が輸出された。<sup>13)</sup> しかし、羊毛と毛織物輸出量の減少を補うまでには至らなかった。York にとってヨーロッパ市場への最も重要な窓口であった Hull の貿易の衰退は、York に多大な影響を及ぼした。14世紀末から15世紀を通じ、York の主要な輸出品は、羊毛と毛織物であり、York の貿易商人組合の多くのメンバーは、これらの取引に従事していた。1475年に組合の総裁であった Richard York は、Calais に羊毛を輸出していた。<sup>14)</sup> また、

彼はステーブルの市長を勤めた。Richard Russell,<sup>15)</sup> John Thirsk<sup>16)</sup> も組合のメンバーであった。15世紀後半の Hull の関税帳簿によれば、1465年に Nicholaus Risworthe<sup>17)</sup> は、York の Trinite 号で31 cloths の毛織物を輸出し、36s. 2d. の関税を支払った。<sup>18)</sup> 1460年から70年代にかけ毛織物を輸出していた Thomas Wranguissh は、<sup>19)</sup> 1471, 72年に、John Kent<sup>20)</sup> は1463年、組合の総裁であった。この時期に York 商人は鉛貿易にも携わった。1465年 York の Trinte 号は6 fothers の鉛を輸出した。また、1467年11月20日 William Todde は15 fothers を輸出した。<sup>21)</sup> 彼は1477, 78年に組合の総裁を勤めた。15世紀第2—4半期からの York の貿易の衰退は、とりわけハンザ同盟との関係の悪化、及び、Gascony 市場の喪失によるものであった。York を始め、Newcastle から Ipswich までの東北部の諸港市にとって、バルチック海地域との貿易は最も重要なものであった。また、ハンザ商人にとっても、これらの港との貿易は重要で、彼らは、特に、Newcastle, Hull をその主要基地としていた。ハンザ商人は、既にアングロ・サクソン時代からイングランドに來住しており、免税の特権など他の外国商人に対して許されなかった諸特権を得ていた。ハンザ商人は木材、タール、塩、鉄、銀、塩干魚、毛皮、その他の雑貨商品、遠隔地貿易によって手に入れた美術織物品、武器、その他の金属製品、ロシアの年市で手に入れた香料やその他の東方の産物等をイングランドにもたらした。ハンザ商人は1359年にロンドンから初めて281 cloths の毛織物を輸出し、以来、14世紀末の1393年から1397年にはイングランドの全毛織物輸出量の平均31.4%を扱うまでになっていた。<sup>22)</sup> 15世紀に入り1437年にイングランドとハンザ同盟がそれぞれの特権を確保して後、さらに、毛織物輸出は増大を示した。ハンザ商人と York との関係は古く、既に、1344年に York から羊毛を輸出した。また、この頃に York の市民となったハンザ商人もいた。Grocelinus del Haghe, esterling は1349年に、さらに、1352年には3人のハンザ商人が帰化し York の市民になった。Henry Wyman も帰化したハンザ商人の1人で、後に York の市長となった。<sup>23)</sup> バルチック海貿易は York 商人にとっても、利益を得ることのできる極めて魅力あるものであった。しかし、この貿易は1447年からのハンザ同盟との関係の悪化によって急激に狭められた。この年、議会はハンザ同盟の特権を廃止した。ハンザ同盟はイングランドの毛織物の輸入、及び、通過を禁止し、ズント海峽を封鎖した。さらに、1468年にはロンドンのスチルヤードが閉鎖された。これによって、ハンザ商人によるイングランドからの毛織物輸出は、僅か860 cloths に急落した。<sup>24)</sup> 1470年から戦闘状態に入った対ハンザ闘争は Lubeck, Danzig に率いられたハンザ連合軍により、イングランドは敗北を余儀なくされ、イングランドの商人はバルチック海地域における貿易の権利を実質的に失った。この長期に渡った対ハンザ闘争によって、とりわけ大きな痛手を蒙ったのは、イングランド北・東港であった。Ipswich からの毛織物輸出量は1465年から1469年に平均 1,856 cloths で、そのうちハンザ商人は1,456 cloths を扱った。しかし、1470年と1474年には、それぞれ 497 cloths, 95 cloths に減少した。Hull を通じてのハンザ商人の毛織物輸出量は1389年には 342 cloths で



あったが、15世紀前半著しく増大し、1414年には1,174 cloths に、さらに、1415年には1,540 cloths に達していた。しかし、1468—69年には、僅か36 cloths に、翌年から1474年までの間に全く見られなくなった。こうしてバルチック海域への貿易から締め出された York 商人と北東部諸港の商人に残された市場は低地地方のみとなった。しかし、この低地地方との貿易は、後述するように次第にロンドン商人の手に握られた。

15世紀第2—4半期からの海外貿易の不振は、York の都市のみならず、貿易商人の組合にも大きな影響を及ぼした。貿易の不振に対処するために都市当局、及び、組合は商品の販売やよそ者に関する多くの規制を作成した。<sup>25)</sup> 1442年にはよそ者の商人に対して市内でよそ者から購入することと、よそ者に販売することを禁止した。<sup>26)</sup> 1459年にはよそ者は指定された宿泊場所以外での滞在を禁止された。<sup>27)</sup> 既に、14世紀の初めによそ者は40日以上滞りを禁止されていた。また、1481年 York に毛織物を持ち込むよそ者は、小売取引を禁止され、卸売取引のみに限定された。<sup>28)</sup> これらの規制は York の取引を York 商人の手に確保し、よそ者の商人を排除することを意図していた。しかし、こうした多くの規制は、かえって York の市場を狭めることとなった。組合もそのメンバーの利益を守るために多くの規約を制定した。1495年の「*Ordinances of the Merchants Mistery*」によれば、よそ者は市の日に市場に行く以外、市内、及び、その近郊で mercery の販売を禁止され、違反した場合には150s. の罰金を課せられた。<sup>29)</sup> また、この時に「……, sall none be chosen to occupy as maister of the said company, but anely able persone, thatt occupyse in a shop in the mercery, ……」との総裁の選出規定を定め、mercery の取引に深く関与していない者、おそらく、毛織物よりも鉛を主に取り扱っていた者から、総裁資格を没収した。さらに、1498年に新しい規約が定められた。組合のメンバーはその船舶の所有者が6s. 8p. を航海毎に組合に支払わなければ、いかなる商品でも低地地方に輸出することを禁止された。既に、商品を自分の望む船舶に積むことは許されず、組合のメンバー以外の者の所有する船舶を雇った場合には、重い料金を課されるという規約が定められていた。<sup>30)</sup> 1501年にはもし乗組員がよそ者の商品を船舶に積んでいるのを見つけれられた場合、違反者を雇ったメンバーは、その違反から2年以内に20s. の罰金を支払わなければならないとされ、その情報の提供者には3s. 4p. が与えられた。この時に新たな役員として broker が指名された。<sup>31)</sup> 彼は販売者と購入者の間の仲介者として活動しており取引の違反を見つけた時には没収された商品の半分を与えられた。15世紀後半、低地地方への貿易に参加することを望む York の貿易商人は、ロンドンに基礎を置くマーチャント・アドベンチャラーズ組合に多額の入会金を支払って加入しなけりなかつた。しかし、この時期 York の貿易は衰退しており、貿易商人達にその余裕はなかつた。彼らの多くは地方の食料市場における取引や鉛の取引に転向した。York の市民登録者に占める貿易商人の割合の低下は、この時期の York の海外貿易の衰退を物語っている。15世紀前半にその割合は Edward の治世の10%から15%に増大していたが、15世紀後半には

11%に低下した。同じ時期に York の毛織物製造も、West Riding の毛織物工業の興隆によって縮小した。1451年から1461年の10年間の市民登録者のうち、毛織物関係者は94人、同じく1481年から1491年には58人となり、そのうち Fullers はたったの9人のみであった。

- 1) Sellers, M., *ibid.*, p. XVI. この特許状は、「Prohominibus mistere civitatis Ebor」宛であった。
- 2) Sellers, M., *ibid.*, p. 44.
- 3) Sellers, M., *ibid.*, p. 46.
- 4) Sellers, M., *ibid.*, p. 90.
- 5) Sellers, M., *ibid.*, pp. 39, 44, 52, 64, 68, 72, 73.
- 6) Sellers, M., *ibid.*, p. XV. n. 1. 1393年にロンドンの mercers は、その特許状のために総額 878s. 81/4d. を支払った。
- 7) Sellers, M., *ibid.*, pp. XLIV, XLV.
- 8) Sellers, M., *ibid.*, pp. 66, 67.
- 9) Sellers, M., *ibid.*, pp. 64.
- 10) Bartlet, J. N., *op. cit.*, p. 27. ワインの輸入量は、1407年から1417年には 14,000 ton を超えていたが、1437年から1447年には10,000 ton に減っていた。
- 11) Carus-Wilson, E. M., *op. cit.*, pp. XIX-XX.
- 12) Childs, W. R., *The Customs Accounts of Hull, 1453-1490, The Yorkshire Archaeological Society Record Series, vol. CXLIV., 1984. p. XIX.*
- 13) Childs, W. R., *ibid.*, p. XXIV.
- 14) Collins, F., *op. cit.*, p. 188. 1468年に York の市長。Sellers, M., *op. cit.*, pp. 64, 71, 72, 98.
- 15) Sellers, M., *ibid.*, pp. 84, 99.
- 16) Sellers, M., *ibid.*, p. 66.
- 17) Collins, F., *op. cit.*, p. 181.
- 18) Childs, W. R., *op. cit.*, p. 93.
- 19) Sellers, M., *op. cit.*, pp. 64, 66.
- 20) Collins, F., *op. cit.*, pp. 153, 185. 1465年に York の市長。Sellers, M., *ibid.*, pp. 71, 114.
- 21) Childs, W., *op. cit.*, p. 110.
- 22) Carus-Wilson, E. M. and Coleman, O. P., *op. cit.*, pp. 85, 86, 194.
- 23) Miller, E., *op. cit.*, p. 101.
- 24) Power, E. and Postan, M. M., *Studies in English Trade in the Fifteenth Century, 1966, p. 407.*
- 25) よそ者 (foreignner, stranger) は、海外からの異邦人のみでなく、国内の city あるいは borough に対してのそれ以外の土地の者をいう。
- 26) C. C. R., vol. 6., 1427-1516, 1927, p. 31.
- 27) Percy, J. W., *York Memorandum Book, vol. II, The Publications of the Surtees Society, vol. CLXXXV, p. 203.*
- 28) Raine, A., *York Civic Records, vol. I., The Yorkshire Archaeological Society, vol. XCVIII., 1938, p. 38., 以下 Y. C. R. と略記。また、1502年には Kendal, Ripon, Knaresborough, Leeds, Wakefield, Halifax, [Bradford] などからの毛織物の販売をホール*

に限定した。Y. C. R., vol. 11, p. 175.

29) Sellers, M., op. cit., pp. 87-93.

30) Sellers, M., ibid., pp. 64, 87.

31) Sellers, M., ibid., p. XLVI.

### (三)

イングランドからの毛織物輸出は、15世紀末から16世紀前半にかけて「彗星のような」増大を示した。<sup>1)</sup> 15世紀80年代の年平均輸出量5,138 cloths から、16世紀最初の10年には81,550 cloths へ、さらに、1535年から1540年には109,292 cloths となった。こうしたイングランドの毛織物輸出の急増は、「アントワープの月が満ちてくれば、ロンドン貿易の潮も満ちてくる」と言われたように、ロンドン—アントワープ間の緊密な関係の上に成り立っていた。<sup>2)</sup> ロンドンの毛織物輸出は、1351年から1355年には、イングランドの総毛織物輸出量の8.4%を占めたにすぎなかったが、1402年から1406年には48.7%に急増し、さらに、1541年から1545年には84.5%に、1559年から1563年には88.0%を占めるまでになった。<sup>3)</sup>

低地地方と貿易をしていたロンドンを始め、全てのイングランド商人に対して、1407年にはHenry 4世の、そして、1462年にはEdward 4世の特許状によって「Holland, Zeeland, Brabant, Flanders のイングランド商人」は、海外の市場都市 (mart town) において総会を開き、複数の総裁を選ぶ権利を付与された。<sup>4)</sup> これにより、地方港の商人は、自ら選出した総裁によって統治される権利をもち、低地地方においてはロンドンの商人たちが1人の総裁のもとに、また、York, Hull, Beverlay, Scareburgh, 及び, Trent 河以北の他の商人たちは、別の総裁のもとに集団を成していた。しかし、低地地方において最大の勢力を持っていたロンドン商人の集団は、次第にこの制度を無力化し、地方港の商人たちに対して、自分達の友愛団体への加入を強制した。友愛団体への入会金は、もともと3s. 4p. で、友愛団体の宗教的な目的にあてられることになっていた。しかし、その後入会金は100 s. Flanders 貨に引き上げられた。もともと地方港の商人は友愛団体に加入しなくても、低地地方への貿易を自由に行なうことができた。しかし、実際にはいかなるイングランド商人も入会金を支払って友愛団体に加入しない限り、貿易に参加することはできなかった。1478年にロンドンの団体は、友愛団体に加入した者以外の売買を禁止し、違反した場合には、そこで売買した商品を没収するという規約を作成し、入会金も£20に引き上げた。<sup>5)</sup> この高額な入会金は多くの地方港の商人たちの貿易を圧迫した。1496年に地方港の商人たちは、国王に対し「高額の入会金により、地方港の商人たちがイングランドの最良の市場から占め出されることになった」と、不満を訴えた。1497年の法令によって、入会金は最高£6 13s. 4p. までとされた。しかし、この法令によってロンドンの組合は、国王の権限をもってその貿易に従事する全てのイングランド商人に対して、入会金を課す権利を認められることになった。このロンドン商人のもとに統合された

低地地方の団体は、1505年に Henry 7 世の特許状により、明確な形の統治機構を獲得した。<sup>6)</sup> この時、「divers Fellowships of the said Merchants Adv<sup>ts</sup>」から、総裁を補佐する「Four and Twenty of the most sodd, discreet, and honest Persons」を参事として選出する権利が与えられ、地方都市の商人は、若干の参事の席を確保することができた。<sup>7)</sup> しかし、総裁や参事を選出する集会ではロンドンの商人が多数を占め、常に、総裁はロンドン商人であった。そして、ロンドンの商人は全ての政策に対して絶対的な影響力をもち、団体の資金はロンドンの組合が管理し、付与された特許状は、Mercers のホールに保管された。

地方都市の商人たちは、こうしたロンドン商人による組合の寡頭的支配に対して、また、煩わしい規制の地方組合への強制に対して嫉視、反感を抱いて非難、抵抗を繰り返した。ロンドン商人に対する地方都市商人の抵抗は、既に、15世紀前半からあり、ロンドン商人の支配が強まるに従い、頻繁に生ずるようになった。1478年に York など北部の商人は、次のような不満を国王に訴えた。「総裁である John Pykering は、入会金を引き上げ、賦課金を不平等に割り当てている。また、毛織物の販売には自分たちに不都合で不利益な場所を割り当てた。それによって50%の価格低下が生じ、不利益を蒙った。さらに、Braband の徴税者には、我々から2倍の税を徴収するよう申し渡した」。<sup>8)</sup> 16世紀に入り、地方港のロンドン商人に対する抵抗は次第に高まり、Elizabeth の治世に峻烈化した。16世紀初め、1509年1月17日付の手紙で Norwich の商人は、「ロンドンの組合が、ロンドン商人の商品が全部市場に到着していないという理由で、毛織物販売のための市場を2回も延期したために、莫大な損失を蒙った」と、York の組合に苦々しく書き送り、「海外の court においてロンドンの商人達によって作成された規約は、不満で同意できるものではない。しかし、court においてそれに反対しても何ともならない」と、York の支援を求めた。<sup>9)</sup> ロンドン商人の支配に対して York では、1481年にロンドン商人に対して York 商人以外への販売を禁止し、<sup>10)</sup> Newcastle では、1548年に「組合のメンバーは、今後この都市の倉庫用家屋や地下室を全てのロンドン商人、及び、よそ者に貸してはならない」という規約を定め、違反者に対して£5の罰金を課した。<sup>11)</sup> こうした地方港のロンドンに対する幾多の抗争にもかかわらず、15世紀末から16世紀前半を通じて、低地地方への貿易支配は増大し、イングランドの海外貿易はロンドンに集中した。それとは対称的に地方港の貿易は著しく衰退した。例えば、Southampton は16世紀初めの10年間に、平均10,382 cloths を輸出していたが、16世紀30年代には、6,055 cloths にまで減少した。Bristol も15世紀90年代の平均6,664 cloths から16世紀30年代には2,559 cloths に落ち込んだ。<sup>12)</sup> 北部港 Hull の衰退も著しく、Hull からの毛織物輸出力は、1497年から1507年の10年間の年平均2,500 cloths から、次の10年間には1,500 cloths に、さらに、1537年から1547年には700 cloths にまで落ち込んだ。総貿易価額も、15世紀初頭の10年間には平均約£40,000に達していたが、16世紀半ば頃には僅か£7,500にまで落ち込んだ。ポンド税の対象となった輸入商品の価額は、1497年から1507年の平均£6,800から1537年から1547年には、£4,000以下になっ

た。<sup>13)</sup> 16世紀前半 Hull での York 商人の貿易額は、1525—26年、1540—41年にそれぞれ £2,502, £2,447で、14世紀後半以後のいかなる時期よりも低下した。毛織物輸出額は、それぞれ £152, £368, ワインを含めた総輸入額は、それぞれ、£1,280, £1,442にすぎなかった。この時期の York 商人の主要な貿易地域は、Antwerp, Middelburg, Bergen-op-Zoom などの低地地方に限られていた。<sup>14)</sup> 低地地方との貿易では毛織物や鉛が輸出され、魚、ワイン、石鹼、ホップ等の他、東インド諸島からの香辛料が輸入された。<sup>16)</sup> 1489年1人の商人は鉛と Kerseys を Holland に送った。また、1508年と1525年には、羊毛と毛織物が Bergen-op-Zoom に輸出された。<sup>15)</sup> 毛織物はこの時期の York にとり最も重要な輸出商品であった。しかし、16世紀初めまでには商人のギルドは、「lede ys our most principall commoditie」と主張した。<sup>17)</sup> 1510年頃に York 商人は、Flanders にかんがりの鉛を輸出していた。低地地方は毛織物と同様、鉛においても最大の市場であった。1536年に York と Hull の商人が、18隻の船舶で400 fothers を超える鉛を Flanders に輸出した。<sup>18)</sup> そのなかで York 商人は、Robert Halle の26 fothers 他合計158 fothers を Flanders に、William Beckewithe, Robert Pecoke, Robert Halle の45 fothers を Bordeaux に、William Watson, Thomas Appleyardeの29 fothers を Gdansk, 及び、East Freesland に輸出した。York 商人の多くは、その取り扱い商品を毛織物から鉛に転換した。しかし、この鉛輸出は York の貿易の衰退を回復するまでには至らなかった。

地方港はロンドン商人によって、低地地方の市場を狭められる一方で、地方港自体の市場も彼らによって侵害された。Southampton の貿易の大部分は、ロンドン商人によって掌握された。ロンドン商人は Bristol の毛織物製造後背地から、毛織物を持ち帰った。ロンドン商人は Yorkshire の毛織物、鉛を求めて市場にきた。そして、従来、York 商人が供給していた輸入商品を、代わってその地域に供給した。<sup>19)</sup> 1519年にロンドン商人 Thomas Worthyngton は、Rippon で鉛を購入し、海路 York に運び、そこで重量を秤り、規定の税金を支払って、Hull に向けて船積みした。また、ロンドン市民の John Gresham, mercer は、York で Richmond の商人 Charles Johnson から20 fothers の鉛を購入した。従来、York や Hull をヨーロッパ市場への捌け口としていた West Riding の毛織物製造地域、Wakefield, Halifax, Leeds の商人や織元たちは、15世紀末ロンドン商人に毛織物を販売した。それに対して、ロンドン商人は彼らに輸入染料を豊富に供給し、毛織物の市場を提供した。York 商人も自らロンドンに商品をもたらし、そこでロンドン商人と直接取り引きした。既に、15世紀半ば Thomas Gryssop は、ロンドンの1人の capper, 1人の spicer を含むロンドン商人に、多額の借金をしていた。1570年に2人の York 商人は、ロンドンの grocer と fishmonger に £139の借金があった。また、1人の bowyer や Thomas Bracebridge の息子のように、ロンドンの市民になるものもいた。<sup>20)</sup> York にとり、海外貿易の窓口として重要な位置にあった Hull との摩擦も、この時期、頻繁に生じた。1508年に York の商人は、「Hull が古来の

慣習に反して、自分たちが Hull で所有している建物や倉庫の中で、自由に他の商人達と取り引きすることを妨げ、また、販売のために、そこにもたらす毛織物と鉛に、よそ者と同じ重い賦課金を課している」と不満を述べた。<sup>21)</sup> また、1532年に Hull は York の商人に対し、Hull 市民の所有する船舶を借りることを禁止し、Hull からの荷物の積み出しを抑制した。こうして York の海外貿易は、15世紀末から16世紀前半、国外・国内両市場の狭隘化、その貿易を依存した Hull の貿易の衰退とそれに伴う Hull との摩擦、さらに、York の海外貿易の動脈とも言える Ouse 河が、土砂の堆積によって航行が困難になりつつあったこと等により、著しく衰退した。<sup>22)</sup> 16世紀前半、市長のほぼ半分を商人が占めたが、その多くは外国貿易に携わる者ではなかった。市長の席は goldsmith, tanner, fishmonger, glover, carver 等、他の種々な職に携わる人々によって占められた。York の貿易商人の組合は、種々の政策にもかかわらず、そのメンバーである外国貿易商人の繁栄を支えることに失敗し、その時代の外部からの諸力を支配することはできなかった。<sup>23)</sup> York の市民登録者は15世紀には8,450人であったが、16世紀には6,055人に減少、そのうち貿易商人は、それぞれ522人、473人であった。16世紀の後半には Hull の衰退の原因が次のように述べられた。<sup>24)</sup> 「主要な貿易の大部分はこの町から取り去られ、かつては、全てそこで売るためにこの町にきていた商品は、今では大部分ロンドンや海外のフランス、その他の地域に送られ、この港に決してこなくなった。それはこの町の貿易の繁栄にとって大きな痛手である。商人は王国の他の港から遠く離れたロンドンの市民がその指導者であるカンパニーに結び付いており、その指導者たちが作成する規約は、常に、彼らにとって有利なものであり、反対に地方港の商人にとっては、常に、極めて不利なものである。そのカンパニーによって、全ての商品がロンドンにもたらされる結果、富裕な商人や織元たちは、ロンドンに引き付けられ、地方港は貿易が衰退した」。

(本研究は、1986年9月から1987年8月までの、ロンドン大学における留学成果の一部であることを付記し、東海学園女子短期大学、及び、財団法人私学研修福祉会に感謝申し上げます。)

1) Fisher, F. J., op. cit., p. 96.

2) Fisher, F. J., ibid., p. 96.

3) Carus-Wilson, E. M. and Coleman, O. P., pp. 118-119.

4) Towney, R. H. and Power, E., Tudor Economic Documents, vol. II., 1953, p. 1.

5) The Statutes of the Realm, pp. 638, 639., 12 Hen. VII. c. 6.

6) Cowston, G. and Keane, A. H., The Early Chartered Companies, 1296-1858, 1968, pp. 249-254.

7) Cowston, G. and Keane, A. H., ibid., p. 250. Carus-Wilson, E. M., The Origins and Early Development of the Merchant Adventurers, Eco.H. R., 1st Ser., vol. IV,

1933.

- 8) Towney, R. H. and Power, E., op. cit., pp. 2, 3. Sellers, M., op. cit., pp. 75-80, XL. 1477年の組合の会計帳簿には, Proexpensis factis erga Johannis Pykryng の見出しで合計 LVIIIs. 1p. の支出が計上されている。Sellers, M., ibid., p. 74.
- 9) Sellers, M., ibid., pp. 121, 122,
- 10) Y. C. R., vol. I., p. 38.
- 11) Dendy, F. W., Extracts from the Records of the Merchant Adventurers of Newcastle-upon-Tyne, vol. I., The Publications of the Surtees Society. vol. XCIII. 1985. p. 260. n. 5.
- 12) Carus-Wison, E. M. and Coleman, O. P., op. cit., pp. 110, 111, 116-118.
- 13) Bartlett, J. N., op. cit., p. 31.
- 14) Sellers, M., op. cit., pp. 65, 70, 87.
- 15) Y. C. R., voll. II, pp. 126, 127.
- 16) Sellers, M., op. cit., p. 93.
- 17) Sellers, M., ibid., p. 125.
- 18) Sellers, M., ibid., pp. 135, 136.
- 19) Sellers, M., ibid., pp. 123., Y. C. R., vol. I, p. 38., vol. III, pp. 22-23.
- 20) Collins, F., op. cit., pp. 134, 150, 169. Thomas Bracebridge の息子 William は, 1448年に York 市民となった。
- 21) Sellers, M., op. cit., p. 119.
- 22) The Statutes of the Realm, 23 Hen.VIII. c. 18.
- 23) Sellers, M., op. cit., p. 130. 1529年の会計帳簿では, subsidies を支払った者は 56 人であった。
- 24) Towney, R. H. and Power, E., op. cit., vol. II, pp. 49, 50.